明珠

龍泉院
参禅会会報

4
昭和61年10月5日

（迦葉山参禅特集号）

従容録に学ぶ（三）

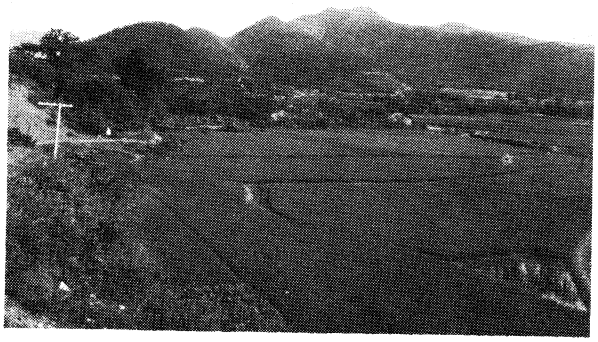
第七則　薬山陞座

〔示衆〕

衆に示して云く、眼耳鼻舌、各々一能あって眉毛上に在り。士農工商、各々一務に帰して拙者常に閑なり。本分の宗師、如何んが施設せん。

〔本則〕

挙す、薬山久しく陞座せず。（動は静に如かず）院主、白して云く、大衆久しく示誨を思う、請う和尚、衆の為に説法したまえ。（重んずるは便く、軽んずるは便からず）山、鐘を打たしむ。衆、方に集る。（頭を聚めて相を作す、那事そ悠々たる）山、陞座し、良久して便ち下座して方丈に帰る。（一場の話覇なり）主、後えに従って問う、和尚、適来、衆の為に説法せんことを許すに、如何んが一言をも垂れざる。（大海、若し足ることを知らば、百川、応に倒流すべし）山云く、経に経師あり、論に論師あり、争でか老僧を怪しみ得ん。（惜しむべし、竜頭蛇尾なることを）



薬山の勇姿（1983. 9. 8）

薬山は、中国最大の湖、洞庭湖の西にそびえる雄大な山です。漢方薬になる芍薬を、今でも産出します。唐代には、その山麓に禅道場が開かれ、石頭禅師の弟子、惟儼禅師（七四五～八二八）が英名をはせました。

大臣の李朝が惟儼さまに教えを乞うたのに答えて、「雲は青天にあり、水は瓶中にあり」と答えたのは、特に有名な話です。それで薬山といえば、惟儼のことを指すのがふつうです。

三年前の昭和五八年九月八日、わたくしはこの山の山腹に遺る惟儼禅師の墓塔に詣でました。初秋の夕刻というのに、折しも三八度という厳しい残暑の中で、玉の汗を流しながら報恩の読経供養を捧げた感激は、生涯忘れることのできない体験でした。

そこから西方の眺めは、延々とひろがる広大な稲田と、はるかにけぶる山なみのすばらしさです。こんな所で修行をしたら、きっと大自然と一枚になった、天地いっぱいの自己を発揮する生きざまができるにちがいない――、そんな思いにかられたものです。

さて、薬山が活躍中のころ、陞座、つまり高座に上って説法することをやらない日々が続きました。そこで、監院さんが大衆を代表して、薬山に説法をお願いしたところ、早速、薬山は鐘を打たせて皆を集めました。待ち望んでいた大衆一同、ソレッとばかりに法堂に集って鶴首して待ち望みました。

ところが、薬山は高座に上って皆を見わたし、やがて下座して方丈に帰ってしまった。大衆はアッケにとられるばかりです。

そこでまた監院が薬山に、なぜ一言も発せられないかをたずねたところ、薬山の返事は、「お経の講義なら経師に、論書の解説なら論師にそれぞれ聞かっしゃれ。何もあんたが口をとがらして、わしに理窟をいうことはないさ」とつっぱねたという一段です。

『従容録』一〇〇則の中に、薬山をテーマとする則は、この一つしかありません。これを見て、薬山とはまあ何と不親切な人よ、と思うのは、実は浅はかな考えです。

初心者が知識や技術を身につけようとするとき、それを先生や書物から学びます。ところが、人は天地自然の深い真理を知ろうとする場合、教えられなければわからないのでは、小児と同じです。むしろ三歳の童児には、大人が失った事物へのあくなき知識欲が旺盛にあります。ただ、子供は本能的な好奇心ですが、大人は心の目や耳で物事を見聞することができます。そうすることによって、自然や事物は少しずつ神秘のヴェールをはいでくれます。

薬山がしばらく説法をしなかったのは、修行者の大衆たちに、みずからの努力精進で、深い仏法の真理を悟る眼を見開かせようとする老婆親切だったのです。のみならず、高座に陞り黙って下座した消息は、あたかも「維摩の一黙は雷の如し」と同じであって、沈黙には無限の説法の声がこめられていたのです。

私たちは百万言の注意よりも、「無言の説法」の力に感化されることを知っています。こう思うと薬山の起居動作すべてが説法そのものであるとともに、自然界の事物も世間の出来事も、みな説法ならざるものはない。それを聞く耳、見る眼をそなえるためには、もう坐禅をするほかにありません。

かの蘇東坡は、廬山の常総禅師に禅を学んだのに、仲々安心がえられなかった。ある夜、山に入り渓流の音を聞いて心のむすぼれがはじめて解けた。その時の心境が「渓声はすなわち是れ広長舌、山色あに清浄身にあらざらんや、……」という有名な詩で、道元禅師がこの無情説法のすばらしさを拈提されたのが、『正法眼蔵』渓声山色の巻です。

このように、自然界の月花や山水に絶体を見、無限を聞くのが禅の世界です。折しも紅葉の時節、カエデやイチョウの美しさは、落葉樹ならではのものです。そこには、散る直前に全生命を激しく燃焼させるいのちの世界があります。

面白いことに、薬山には無言と対照的な大笑一声の話しが伝わっています。ある夜、この山の頂に登った時、折しも雲間から月が現われ、光々と辺りを照したのを見て、呵呵大笑した。この笑いは、何と九〇里四方の村人で聞かぬ者はなかった、というのです。

雲が消えて、月が現われたのではない。眠らなければ、目覚めることがないように、迷わなければ悟りは不要。人に本来そなわっている月の光りこそ、絶体の真理ではないか。薬山の大笑一声は、山頂でこれをたしかめられた、大いなる喜びの声だったのでしょう。

黙して説法をしない反面、九〇里四方にひびき亘る大笑とは、いかにも薬山の、天地と一枚になった自由の境地を示す痛快な話です。

迦葉山一泊参禅参加者一同　(61・6・8)

迦葉山へ一泊参禅

六月七日午前九時三〇分、龍泉院を出発したバスは、一行一九名を乗せて、群馬県沼田市の山中にある迦葉山龍華院へと向かい、一泊参禅の旅がはじまりました。

車中まもなくマイクが廻され、今回の参禅についての気持を一言ということになり、皆さんがこもごも語られた内容は、こうした機会にめぐりあえた喜びと感謝の言葉でした。

「今日は、会社も家庭も、日曜の畑づくりも、好きなゴルフも、みな忘れて頑張ります」と、一同まさに童心にかえり、心を澄ませて、目的地に向って心躍らせている感がみなぎっていました。

途中、子持山の山麓にある曹洞宗の名刹、雙林寺にお参りさせていただきました。約五三五年前に創立されたというこの寺の周囲には、天を衝く老杉がそそり立ち、昔から語り伝えられている寺の七不思議をたずねて、多くの人々が訪れるといいます。

午後四時一〇分、バスは曲りくねった山道を登りつめて、天狗さまの寺、龍華院に無事到着しました。小雨の降る中、受付をすませて、参禅係の僧、勝俊さんのご指導により、差定に従って参禅の日課が開始されました。差定はつぎのとうりです。

〔第一日〕　六月七日（土）

一、入　浴　　午後四時三〇分
一、薬　石　　〃　六時
一、夜　坐　　〃　七時三〇分
一、開　枕　　〃　九時

〔第二日〕　六月八日（日）

一、起床洗面　午前四時三〇分
一、暁天坐禅　〃　四時四五分
一、朝　課　　〃　六時三〇分
一、小　食　　〃　七時
一、法　話　　〃　八時三〇分
一、坐　禅　　〃　一〇時
一、禅　講　　〃　一〇時四五分
一、中　食　　〃　一一時三〇分
一、下　山　　午後一時

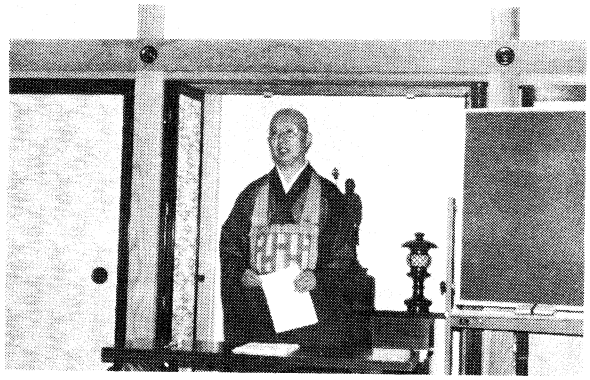
ただし、禅講は都合によって座談会にふりかえとなりました。こうして、無事に一泊二日の参禅団参を終えることができました。山主様をはじめ、お寺の皆様のあたたかいお心くばりを有難くいただき、山の霊気に身も心も清められ、一同下山することができたことは

本当にありがたく、心から感謝いたします。

以下、迦葉山山主羽仁素道老師のご法話の要旨と、参加者の中から寄せられた参禅記を、順に綴らせていただきます。

（参加者）

高間利介、小畑節朗、寺田哲朗、富田文子、武山喜代子、神戸正、平沢満代、徳山浩、高野千代子、三町勲、中嶋南州男、沢村国勝、塩崎康之、金崎央、染谷はる、村井ハマ、下村忠男、武田博志、石井勇　（順不同）



山主　羽仁素道老師の法話

「願い」に生きる

迦葉山龍華院弥勒寺
山主　羽仁素道

御縁を頂いて、当山にご参拝いただき、ご遠方のところ御苦労様でございます。

この迦葉山は谷川連峰と武尊山の要の地にあって、今は便利になって車の通る道も出来ましたが、昔は麓の茶店から歩いていただきました。今日は森林浴などと言われておりますが、このような千年を経た杉木立を通って参りますと自然と心が清浄になります。

「境は気を移す」と言われますが、千二百年の歴史とこのような清浄な環境に在りまして、有難く勤めさせていただいております。

さて、〃御縁を頂いて〃と申しましたが、仏教は縁を大事にする宗教です。ある意味で「縁の宗教」といってよいかと思います。私共が生れてきたのも一つには縁によっている。何事もつながりがないとものは生じない。そのつながりと私共がどのようなかかわりを持つかという事で人間の生きざまが大きく変って参ります。そのことから、禅宗では「正師」を持てと言っております。その意味で指様は大変良い師を持っておられます。龍泉院の方丈様は大変立派な方です。私とは大学の同窓ですが、若い時にご両親を亡くされましたが苦境をのりこえて、むしろそれを良い縁へと転ぜられました。

仏教の教えの基本に、「無常」の思想があります。あらゆるものが一点に留まっているのではなく常に移り変っている。この移り変りを、また「三世」の思想で教えております。

現在は過去を負い、現在が未来を産むという形で、現在の私共の生きざまが現在を起点として、未来と過去との双方にかかわり、影響を与えるという観方（十二因縁）をしており、すべてのものが一瞬一瞬に過去―現在―未来と流れゆき、しばらくも留まるものではない。このような考え方が「無常感」であります。

一瞬一瞬に流れ行くなら、ほっといても流れて行くんだから、どうでも良いのではないか、と言われるかもしれません。が、決してそうではありません。我々は誰れでも幸せに生きられ、安穏な日々を送り長生きをしたいと言う「願い」があります。本当に充実した人生かどうかは「願い」があるかどうかに掛ってきます。何を願いとするか、祖師方も大きな願いを持っておられた。これは一口に言うと「人の痛みがわかり、人の幸せがわかる生き方をする」ことであります。年令にかゝわらずその時その場所で「願い」を持たなければならない。

お釈迦様は「苦」を救う「願い」をもって仏教をお開きになったとも言えます。この人間世界は苦に満ちている。生も苦しみであり、老いも病いも、必ずやってくる死もみな苦しみです。この苦しみを抜き楽を得ることを四諦（苦集滅道）の真理をもってお示しになられた。この実践をいちばん表に出した宗派が禅宗ですね。禅が「実践の宗教」といわれるのは、そのためです。

ここの先々代の山主でおられた清水老師は、日頃から山中の無能庵で行持綿密、金沢の大乗寺では沢木老師とで一諸で、風貌から寒山拾得に擬された方ですが、私共の顔を見ると「勉強するんじゃない。坊さんは勉強しちゃだめだ」と何時も叱られた。これは頭だけの勉強を戒められたのです。学問

するなというのではないのです。正しいものを、常にあるべき姿で見ることが出来る。とらわれのない正見の眼を開いた実践がいかに必要かをお示しになっておられたのです。

「願い」を持つ、目的を持つと正しい実践による不動の信念が生じ、本当に人を叱る自信のある人間になるのです。

先程「正師を得よ」と言いましたが、どっちでも良いと言うのでは駄目なんです。どっちでも良いと言うのは両方悪いということ。皆様は非常に良い師を持っておられる。今後一層のご精進を念じる次第であります。

昨晩も夜半になって「仏法僧」が鳴いていたようです。四月から九月初めまで鳴きます。やはり山の高さをして「仏法僧」を鳴かせてくれるのでありましょうか。

本日は、良いご縁を結ばせて頂いたことをお礼申し上げる次第でございます。

（この原稿は、迦葉山でのご法話の要旨を記させて頂きました。）

新天地をいただいて

沼南町　高間　利介

皆様のお陰で、迦葉山に坐禅をする機会をいただいたことは、有難いことでありました。いろいろと学び、教えられたことが沢山ありましたが、その中で二、三を述べさせていただきます。

第一は、暁天坐禅につづいて、本堂の外廊下から、遥か山並みを越えた皇居に向い、君が代を斉唱したことです。その後で山主様のお話をうかがいましたところ、今我々が世界中から羨望されるような生活を送ることができるのは、戦後、無一物の廃墟の中必死の努力を重ねてきた多くの先輩のお陰であり、その国民の象徴であられる天皇陛下に感謝と報恩を誓うことは大切なことであります、というお話でした。毎日、起きたら、まず働くこと、生きることを思いなかなか国の有難さを考えられなかった今までの生活を、申しわけなく思いました。

第二は、御指導をいただきました中に、行動予定は五分前に、ということでした。私共、八時就業といえば、八時に集まるという日常でしたが、「行動はすべて五分前」というもののけじめのつけ方、そういう自主性の大切なことを改めて考えさせられました。

第三は、食事の作法のご指導についてですが、小皿についている沢庵は必ず一切れ残し、最後にいただく。白湯でその沢庵を用いて食器を綺麗にすすぐ、ということでした。このたび、われわれの食器は厨房で洗われ、食器棚に納められましたが、雲水さん達の場合は、白湯ですすがれたまゝ膳と共に納められるので、食事は残さず全部いただくことが正しい作法であることを教えられました。

そのほか、いろいろ新天地に生まれ、かわらせていただいたような二日間の参禅でした。早朝の作務の中、小鳥の囀りを満喫できましたことは、全く素晴らしい思い出となりました。来年は、もっと浄化された心境で、参禅旅行に参加できるよう、仏心を忘れず、精進のまねごとを続けたいものであります。有難うございました。

食事の前に

参禅の旅

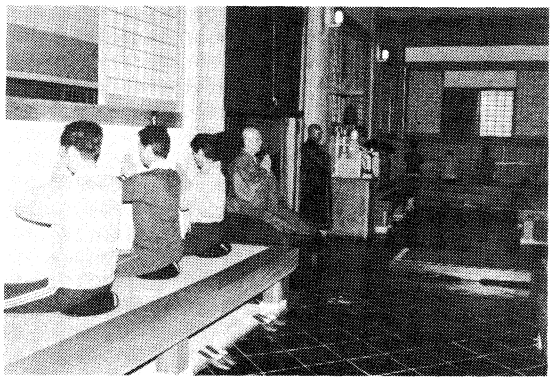
印西町　富田　文子

このたびの迦葉山の参禅に参加することをきめたものの、バスの長旅に弱い私は、幾日も迷い続けました。結局、家の若い者が「二度と行けないかも知れないから行ってきたら」と勧めてくれますし私も是非行ってみたいとの思いもつのって、仏様がご一緒の旅だからと参加することに致しました。柏駅で武山さんや、平沢さんと一緒になり、柏市役所前からバスに同乗させて頂きました。乗車してからも、皆様に迷惑をおかけすることがないようにと、そればかり気になる私に、高間さんや小畑さんが、大変気をつかって下さり有難いことでした。車中一九名の旅は、座席もゆっくりかけられ、その内不安もきえて、うつらうつらとねむっておりました。

途中、雙林寺に立ち寄り、七不思議を拝観させていただき、迦葉山にバスが着く頃は、しのつく雨でした。門前の大きな天狗様には驚きました。昔この山の天狗様は、大きな木の葉の扇を持ち、高歯の下駄をはいて、色々なことをなさったのであろうと想像いたしました。

私達に割り当てられた部屋へ、若い僧侶がお見えになり、これからの差定を教えて下さいました。

そして、先ず入浴、体を清めてから夕食、おいしいお料理でした。片づけを皆で手分けしていたしました。男の方達も食器洗い、消毒と平素なさらないことで、大変だったと思います。夜の坐禅は長い長い廊下をまわって坐禅堂へ着きましたが、足許がほの暗く不安でした。坐禅堂には、ご住職様らしいお方が端然とお坐りになっておられました。龍泉院より他に坐ったことのない私は、緊張した時間



暁天坐禅

でした。太鼓の音が五臓六腑にしみ通り、坐禅の重さを感じました。

翌朝は、昨夜とうって変った晴天でした。暁天坐禅の後、一同君が代を斉唱しました。目の前の連山を眺めながら、幾一〇年も口にしたことのない国歌には、やはり日本人として生きてきた思いで、身のひきしまるのを感じました。朝の作務としての庭掃除もすがすがしく、このお山の秋、冬の自然を想像しながらお役を終らせて頂きました。朝食後、ご住職様より法話をいただき、静かなたたずまいの中で、一人有難く聞かせて頂きました。それから、また坐禅、懇談と続き、中食後下山いたしました。帰りの車中は、皆様大役を果した気楽さがみなぎり、本当に有難い参禅の旅でございました。

暁天坐禅の緊張

千葉市　寺田　哲朗

群馬県沼田に入ってから、一六キロ、延々と山路をバスは登り、迦葉山頂に着きました。

およそ千二百年前、道もない深山に堂を建て、修行した人々の労苦はどんなであったであろうかと偲ばれました。

暁天坐禅の終りを告げる大太鼓の響きは、天地を震動し、一瞬、ビクリとなったことは忘れられません。

そして、その太鼓の音の間をぬって響く梵鐘の音で、その緊張が次第に解け、心洗われた思いがいたしました。

参加者一同が、丸くなって話しあった座談会の中で「管理社会の中にあって、この参禅会ぐらいは管理されることのない場にしよう」という意見には、なるほどと思い管理しないところで成功している我われの参禅会に対し、共鳴したしだいです。

原点を見つめて

松戸市　徳山　浩

天狗の霊峰「迦葉山龍華院弥勒護国禅寺」での一泊参禅会は、私にとってはじめての経験でしたがひとことでいえば、感動そのものでした。

ご住職には、直前の急用で同行していただけなかったことは、何より残念でしたが、ご住職はじめ幹事の皆様のお取り計らいにより往復のバス、途中の食事、名刹、雙林寺への参拝、等々全くいうことなしの道中でした。

山では入浴、薬石、夜坐、開枕と続き、翌朝の暁天坐禅、朝課と感動の連続でしたし、前夜の雨にうたれた緑したたるばかりの木々の下での、あの爽快な掃き掃除の作務などは、皆様も強く印象づけられたことと思います。

山主、羽仁老師の暁天坐禅でのお話し、午前の法話もそれぞれ坐禅、仏道の基本についてのご垂示で、深く感銘いたしました。

食べること、寝ること、働くこと、坐ることと、日常生活の一番大事なことの基本について、いろいろ教えられ、また考えさせられた一泊だったと思います。

更にこのことが、参禅会の皆様方と一緒に体験できたということに、一層の意義深いものがあったような気がいたしました。

しかし何といっても、私達の坐禅の基本は、龍泉院での毎月の例会にあるのです。今の私達がおかれている恵まれた現状に、改めて感謝いたしますと共に、今後も皆様と一緒に励んで参りたいと思っております。

赤心

我孫子市　三町　勲

早朝坐禅の終りに、道場内の大太鼓が響きわたった。その響きが下腹の心にずしんと、あたかも早朝の静かに澄んだ湖面を波立たせるように思える。しかし、次の瞬間に心の奥底か限りない静けさの中に吸込まれてゆく。あたかも下界で穢された汚れのように、濁りきった心の泉が澄みきってゆくように思えた。

坐禅を通して、身体の奥底の赤心が蘇ってきたのだろうか。無の境地の中に仏性があることが、又坐禅そのものが仏性であるのだと云うことを、この山中で発見したような気持がした。「この境地を何時までも心の中にとどめておこう」と思いながら下山した。

いびきの三重奏

流山市　中嶋南洲男

今迄にも、会社や、お客、同僚の方々と宿泊する機会はありましたが、今回、迦葉山の参禅宿泊で体験した「いびき」ほどびっくりした事はありません。その「いびき」は、小畑さん、寺田さん、沢村さんの三人で、小畑さんが「ガグワー、グワー」と大いびきをかくと、それに答えるように、寺田さんが「ググワー、ググワー」とあいづちをうち、沢村さんが「ブル、ブル、グワー」と八〇畳の広間の隅のくもの巣もゆれる程の「いびき」の三重奏でした。

これも迦葉山参禅での楽しい思い出の一つで、龍泉院の日曜参禅では考えられない出来事でした。

教育は呼吸なり

沼南町　金崎　史

未知の天狗の山へと、一路六時間の道のりを行き、またたく間に標高千メートルの高地、迦葉山に到着した。

早速夜坐にのぞみ、その張りつめた思いは、龍泉院の本堂に入るときの緊張感以上のものがあった。

坐禅中、御住職の法話の中で、最初に耳に入った印象深い言葉がある。それは「教育は、呼吸である」の一言。その意味深いお言葉に続いて、「脐下丹田の赤心に栄養補給せよ」とおおせられ、具体的に説得力ある表現でお話しされたのが頭に深く残った。

暁天坐禅も、誠にさわやか、そして、この山頂のお寺で、国旗が掲揚され、国歌の斉唱が行なわれた。一同で斉唱した後のすがすがしさ、まことに心洗われる気分となった。

スケジュールの最後に、御住職の法話があり、私なりに要約してみると

一、禅は、縁を大事にする

一、正師を持て

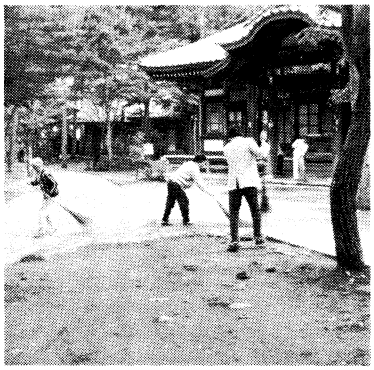
一、叱る自信を持って生きよ

の三点を特に注目した次第です。

日常、禅書を本棚に飾って眺めるだけで、一向に身につかない自分が、今回の参禅により、沢山の御教示をいただき、感謝すると共に、このいただいた知恵を、今後の生活に活かしてゆきたいと思います。

また、お山でいただいた食事のおいしかったことと、過分な量に驚かされました。

帰りに買い求めた「山ウド」「ワラビ」の味は、晩酌のつまみに格別な味でした。このすばらしいご縁は、明日の生活に、大きな活力となることでしょう。本当に有難うございました。



朝の掃き作務

心豊かに

松戸市　平沢　満代

緑美しく、空気のおいしい迦葉山から帰ってまいりまして、三日過ぎましたが、まだ心豊かな思い出が残り、消えません。

私は、一泊参禅会に参加するというのは初めての体験でしたので、皆様の迷惑にならない様に、一日三回も坐れるだろうかと心配しました。

夕方龍華院に着くと、さっそく熱い熱いお風呂に入らせて頂いて旅の疲れをとり、典座様の心のこもった薬石を頂だいし、ゆっくり一休みして、静かな静かな夜坐、さわやかな暁天坐禅、その後の作務。朝食の後に老師様の法話にもありましたが、私は良い縁に恵まれて、幸福だとつくづく思いました。

正しく導いて下さる椎名老師様始め多くの先輩方、このご縁を大事にさせていただきたいと思います。最後になりますが、幹事をして下さいました方々、どうも有難うございました。お世話になりました。

雙林寺

柏市　下村　忠男

老杉のうっ蒼とした山道を登って行くと、芥川竜之介の「羅生門」を思い出させるような、古めかしい山門があり、草鞋や草履ですりへったのであろうと思われる石段を上って、案内をこうと、品の良い女性がまるで絵の中から抜け出たように、三つ指をついて現われ本堂の方へ導いてくれました。

東大寺を思わせるような、大きな木造つくりの本堂に入ると、古い歴史の流れが静かに息づいている。そんな思いが感じられました。庭へ出て、小梅を一粒口に含むとそのすっぱいこと、酢っぱさが口中に広がりました。

そして雨の中、めざす迦葉山へとバスは向いました。雨にぬれた雙林寺のたたずまいは美しく、名刹の美は、いつまでも忘れることができません。

本物に生きる

我孫子市　武山喜代子

緑一色の迦葉山での坐禅会に参加することが出来まして、始めての事で何もかも新鮮な感激でした。

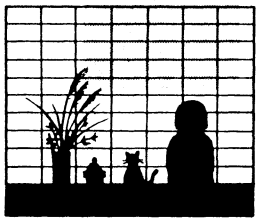
夕食後の夜坐、長い廊下を伝わってほの暗い坐禅堂に導かれ、自分の影がうつる壁に向って坐り、緊張の四五分がとても短く感じられました。終りの太鼓の音が体中に響き、しみ通って行く思いでした。

翌早朝の静寂の中での暁天坐禅は寝不足も気にならない程、頭の中がすっきりとし、気持も引き締ってしっかり坐ることが出来ました。昨夜の雨も上り、美しい山並を眺め乍ら大きな竹箒でのお掃除も久し振りで、楽しい作務でした。

法話の中で「その場その場で本物に生きる」というお話しがありましたが、残る人生を本当に一生懸命生きようと思います。

心の中に豊かなものがふえた様な、何とも云えない幸せな気持になりました。

幹事さんには、いろいろお骨折り頂きまして有難うございました。おかげ様で有意義な楽しい参禅会でした。



お世話係として

習志野市　沢村　国勝

当会初めての一泊参禅は、龍泉院椎名老師の温いお心くばりをいただき、一九名という多くの参加者をみて、非常に有意義なものとなりました。団参の素晴らしさは全く参加したものでなくては判らないもので、今回、ご都合が悪く参加出来なかった方には、次回のご参加を是非おすすめします。

お山に着いてからの、迦葉山龍華院羽仁老師のご指導も素晴らしいもので、参加者一同、心より感動いたしました。参拝者やお寺の行事でお忙しい中、暁天坐禅、朝課、法話等温いお人柄が偲ばれました。本当に有難うございました。

今回の参禅は初めてのことで、お世話係といたしまして、いろいろ、いたらないことも多く、参加者の皆様には、意に満たない点も沢山あったことと思いますが、お許しいただきまして、次回にはもっと沢山の方々のご参加をいただき、年中行事の一つとなることを願っております。

皆様のご協力、本当に有難うございました。心より御礼を申しあげます。

作刀と坐禅（四）

―『刀剣五行論』作刀の原理―

船橋市　森岡　俊雄

今回は日本刀製作の原理に関し、拙工の先祖の南海太郎朝尊（なんかいたろうともたか）の『刀剣五行論』（秘伝書或いは原理書）について書いてみます。

私は毎日金鎚は持っておりますが、筆は持ったことがありませんので、鍛刀の実際を見て頂く方が早いのですが。

私の先祖は、森岡南海太郎朝尊と申しまして、土佐の出身です。文政年間（一八二〇年代）に上洛して粟田口伝を学んだといわれております。当時歌人としても一家（ちくさありこと）を為し、左近衛権中将の千種有功（ちくさありこと）卿の鍛刀の相手もいたし、土佐出身ですので、南海太郎と称した訳です。

鍛刀界においては、江戸中期以後の国学復興と勤王思想が熟したことから、刀はすべて、鎌倉・南北朝時代の作風に復すべきであると力説され、古鍛冶の研究が行われました。この提唱者は江戸の水戸（みと）心子正秀（しんしまさひで）と南海太郎朝尊であり、

「東の正秀、西の朝尊」といわれたと聞いております。

『刀剣五行論』は、上下二冊に分かれ、序文は漢文で、「夫刀剣は、国を治め家を守護し、上は朝廷より、下は衆民に至るまで、身に於いて放さず、その用となすは兵器第一也、云々」から始まり、鍛刀の原理を中国の五行説にあてはめて述べています。

五行とは現代ではあまり聞かれませんが、「中国古来の考え方、天地の間に循環流行して停息せぬ木・火・土・金・水の元気、万物組成の元素、木から火を、火から土を、土から金を、水から木を生ずるを相生といゝ、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に剋つこれを相剋という」と物の本にあります。これを鍛刀原理として論じたものです。

上の巻は、「木性」、「火性」、「土性」、「金性」、「水性」、「五色之変」の六編に別れていて、刀を鍛えることに必要な、炭、火焼刃土、鋼、焼入れ、の一つ一つを五行により説明しております。たとえば「水性」において、

「水曰、大陰は水也。此地を見れば、月と名付て尊し、形丸くして世界と見へたり。云々。此国ニ而者天より降バ雨ト云。雪あられ氷も水。大洋潮にも水有。地より出るも有。山に寄ては岩滝より出るも有。水清浄而強く剣を造るには地より出るを用るなり。

剣を火に焼て水に入れハ金は火に剋して、火は水に剋シテ冷たる時剣の刃かたくなりて切ルやうになるなり。云々。

此国京師は北極地三十六度と云説も有れども、正測ル所者三十五度之余而六度に者不足、十一月冬至ヲ以暦の始とし、子ノ月十定ナリ。中略。故に太陽遠クして陽気薄し、寒冷ニ而雪霜降水モ水リ、地気燥キタリ。此故ニ水は強シ。」といった調子です。

下の巻は、「鍛之法」、「焼刃渡之事」、「造刀心気之法」、「武用之事」、「荒刪之事」の五編になっております。

各編の表題の如く、先の二編は作刀の実際の技術、中の一編は刀匠の心術、そして後の二編は、実用上の切れ味などと、研ぎ方法にかゝるものです。

大体、刀鍛冶が打って焼を入れ、中心（ナカゴ）、鉈ならば「コミ」を仕立て銘を切ったものを荒身と申します。此の荒身を作るのが、刀鍛冶（小鍛冶）の仕事です。それに対して、砂鉄より吾々の使う鍛刀原料（主に玉鋼）を作るのが大鍛冶屋です。

能や講談でやる三条小鍛冶宗近とは、京都三条に住む刀鍛冶の宗近という意味です。

まず大鍛冶屋が、大きな吹子（タタラと言う）で炭と砂鉄を交互に積んで吹き卸します。これを水冷或いは空冷して打ち割った物が吾々の使う鍛刀原料です。この中に、銑と玉鋼と鈩とがあります。鈩は炭素量の低いもので、〇・三%程度の炭素量があります。主に刀が折れない為に、刀の中心に入れる心金に使います。この卸し方にも、非常に難しい技術が要るのは間違いありません。

私は小鍛冶ですから、実際にやった事はないので、本当には判り兼ねます。只現在の製鋼法との違いを申します。

現在は燃料にコークスを使い、熔鋼炉の中で湯にしてしまいます。（湯とは高温で流体の銑の事）これを脱炭して、鋼なり地金なりに作って行きます。これに反して、タタラ吹きー古代製法ーは、直接製鋼法で、銑、鋼、地金、と別れて出来ます。なお作業温度が低い為、大体半熔半解であります。これが切れ物として優秀性を誇る原因と聞いております。この原理を述べるのは学者の仕事で、職人の仕事ではありませんので、通過させていただきます。

さて、刀には色々な打ち方がありますが、一般論を申しますと、大鍛冶の作った玉鋼を鍛錬して刀にします。そこで鋼の鍛錬は専門ですので、少し書いてみます。これは単なる刃物にするのはさして難しい仕事ではありませんが、名刀を作るとなると大変難しい。

作業を簡単に申しますと、鋼の餅つきと考えていただければよろしい。つまり鋼を熱して薄くして折り重ね、これを鍛接してまた折り返す、この作業を一二回から一六回繰り返して皮金を作ります。これに心金を入れ、延した物が刀と考えて良いでしょう。文章に書いてみた所で、実際を見なければ判らないでありましょう。

この作り方に十文字鍛と短冊鍛がありますが、余り専門的になるので、この辺にしておきます。

五行論、下の巻「焼刃渡之事」は

龍泉院参禅会簡介

一、日時　毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと。）

一、坐禅　止静　鐘　三声　坐禅
　　経行　鐘　二声　経行
　　放禅　鐘　一声　放禅

一、講義　木版三通　開経偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聴く
　　講師　龍泉院住職椎名宏雄老師
　　昭和六〇年一二月より「坐禅箴」の巻を提唱中

一、座談　自己紹介の後、茶を喫し座談
　　正午解散

一、参加資格　年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。

一、会費　無料

一、成道会坐禅
　　月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月七日）。釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

「焼様ハ吹子ニ而も焼火を起してうちはにてあふり焼も有。棟方刃方より火をかける。火取の色は朝の日、日中、夕日、夜ル日の光りによって色を見る。日中にて戸をしめ、くらくして焼は、火色よく見ゆる也。或者桃色、或ハ山鳥の尾色、或ハ薄紅色、或ハ燈火色。或ハ白く、皆鉄之強弱に応じて焼くなり。云々」

と名文で綴っておりますが、作品は文程には行っておりません。

▼後白河法皇御撰の『梁塵秘抄』は平安時代末期の「今様」（当時の流行歌）を集成したものとして名高いが、巻第二、法文歌二二〇首中に、僧歌一〇首を収める。その内七首までが「迦葉尊者」を歌い、残り三首は「聖」を歌っている。

迦葉尊者の禅定は、鶏足山の雲の上、春の霞みし龍花会に、付嘱の衣を伝ふなり

迦葉尊者の石の室、祇園精舎の鐘の声、醍醐の山には仏法僧、鶏足山には法の声、

迦葉尊者の石の室、入るにつけてぞ恥づかしき、縁執尽きざる身にしあれば、袂に花こそ止まるなれ

以下全て「迦葉尊者」から始まる歌である。過去七仏の「迦葉仏」の信仰と共に、釈尊の一番弟子である迦葉尊者は入定して当来の仏である弥勒仏が出世の暁を待つ、という信仰が、当時民衆のあいだに相当深かったことを物語っているようである。

名は体を表す、といわれるが、迦葉山の風光は、まさにこの梁塵秘抄の歌謡そのまゝの姿を、歴史的にも残しているかに思われた。

（節光記）

沼南雑記

〔参禅会記録〕（　）は座談の司会

四月二七日　二六名
（小畑節朗）

終了後裏山にて〝筍掘り〟を行う

五月二五日　三〇名
（高野千代子）

六月七・八日　一九名
一泊参禅　於迦葉山龍華院
幹事　沢村国勝　写真　徳山浩

六月二二日　三二名
（寺田健二）

七月一九日　二二名
（武田博志）

八月二四日　二七名
（下村忠男）

九月二八日　三三名
（森岡俊雄）

●発行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎0471(91)1609
●印刷／岡刷株式会社　柏市高田1116　☎0471(43)3131